

中高一貫教育等に係る懇談会概要

1日 時：平成16年9月3日（金）午後1時30分～午後3時30分

2場 所：京都府公館第5会議室

3配布資料：別添のとおり

4主な意見等

（1）洛北高等学校及び洛北高等学校附属中学校における中高一貫教育の現状について

委員等の意見

- ・洛北高校附属中学校の入学生の地域割合の現状はどうであるか。
- ・中学生の部活動の時間帯は限られており、中学生の部活動が終了してから高校生が活動しているのか。同じ部活動ならば中学生と高校生と一緒にできないか。
- ・どういったところが洛北高校附属中学校のあのような人気につながったのか。
- ・洛北高校附属中学校は新しいニーズに応じたものであり、そのことが高い期待を生んだと言えるのではないか。

府教委から

- ・京都市域以外からは乙訓地域10名、山城地域12名、南丹地域7名、中丹以北地域3名入学している。
- ・部活動については中学生は体育系にも多く入り、中学生と高校生と一緒に活動しているものもある。ただし、洛北高校には普通科第 類体育系もあり中学生には高度すぎる面もあるので、注意が必要ではある。高校生が中学生を教えるときには、和気あいあいと活発に行動しており、異年齢集団が良く刺激しあっている。
- ・洛北サイエンスという中高一貫教育の理念に惹かれ、真に自分の興味・関心を学習したいという生徒が集まったのではないか。

（2）今後の中高一貫教育について

委員から

- ・府民のニーズをいかにとらえるかを考える必要がある。
- ・小、中学校教育、地域社会への影響を考える必要がある
- ・京都らしさのある中高一貫教育とは何かを考えていかねばならない。
- ・教育課程は教育において一番大切なものである。併設型と連携型は教育課程の柔

軟性に差があるのではないか。

- ・連携型は導入しやすいが、中身をしっかりとつめなければ、本来の意味での中高一貫教育とはならない。中身の方向性をしっかりと持つことが必要である。
- ・地域に対してはインパクトを与えたいと思う。保護者の期待は大きい。併設型である洛北高校附属中学校には個性ある生徒が集まったということではあるが、やはり一定レベル以上の生徒が集まっている。連携はあくまで市町（組合）立中学校であり、様々な生徒がいる。そういった部分への対応も考え、進めなければならない。
- ・府立高校と市町（組合）立中学校の間には仕切があるが、連携型の中高一貫教育を行えばその仕切を消すことができる。ただやはりお互いの立場の主張がぶつかり、完全に連携しきれない部分はあるかと思う。
- ・地域のニーズは確かにある。公立中学校に落ち着きがない場合、保護者は私立中学に対して持つのと同じ期待を中高一貫教育校に持つこととなる。
- ・連携型は中高間の仕切を乗り越えるメリットはあるが、進め方が難しい。また地域的なバランスも当然必要となる。併設型の方が理想には近いという見方もある。
- ・北部地域でも様々なニーズを持った児童、生徒は確かにいるので、北部地域からも通学できるような場所にあれば良い。やはり地域性の問題は大きい。
- ・併設型の問題点として、一定の層の生徒が地域の中学から抜けてしまうということ。連携型の問題点としては、高校と中学が教員一人一人のレベルで真に連携していかねばならないということ。
- ・中学から高校を選ぶとき、野球が強いから、名門だから、などで実際選んでいる。競争という意味で高校選択が顕著にあらわれている一方で、ゆとりを強調した中高一貫教育でいいのかという部分もある。
- ・進路変更という観点からは連携型が柔軟ではある。
- ・山城地域では高校の特色づくりが盛んである。あまりに特色を出した中高一貫教育校だと他の高校となんら変わらない。通学範囲に一つという意味がなくなり矛盾することになる。
- ・中高一貫教育校の特色とはその地域ならではのものが必要である。
- ・基本的に中高一貫教育というシステムはいいものである。設置の検討を進めていただきたい。
- ・実際に行う中高一貫教育を進めたとき、教員の校務が増えるのではないかと危惧している。
- ・高校でしか教えなかった教員が中学でも教える。逆もある。そういった刺激は教員にとっては大切なことではないか。校務が増加するということはないのでは。
- ・実際中高一貫教育をするということになれば、地域の反響はすごいと思う。

- ・連携型の場合、連携していない中学校からの当該高校への入学が不利になるという危惧はある。
- ・少子化により北部では1学年10数名程度の小規模な小中学校がある。中高一貫教育で生徒を伸ばすという観点も一定大切であるが、その分地域の中学校がさらに小さくなってしまう。
- ・学力だけではない様々な中高一貫教育校が必要なのではないか。

府教委から

- ・これまでは併設型の方が教育課程において柔軟性があり、また連携型は、対象地域が地元地域に限定されてしまうという面があった。
しかし、連携型においても柔軟な教育課程を組むことができるようになり、今後の展開については、十分に検討して行かねばならない。
- ・普通科だけではなく、総合学科、専門学科、単位制高校との中高一貫教育もある。
- ・実際どれぐらいを通学範囲と判断するか、どのような特色を出すのか、そういった部分を十分に検討せねばならないと認識している。